

〔研究論文〕

学級経営の充実に資する小学校係活動の研究
-居心地の良い集団による遊びを基盤とする活動を通して-
A study of class monitor duties at elementary school that
contribute to the enhancement of classroom management
-Activities based on play by a cozy group-

脇田 哲郎

Tetsuro WAKITA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻

本研究は、小学校学習指導要領解説特別活動編（平成29年告示）に示された、自発的・自治的活動を中心とした学級経営の充実に目指したときに、どのような活動が学級経営の充実につながる係活動なのかを明らかにしようとするものである。係活動は、学級生活の向上を目指して児童が創意工夫しながら取り組む活動であるが、係を構成するメンバーによっては、係の集団内に格差が生まれすべての子供たちに居心地の良い集団になり得ないこともある。そこで、福岡県内の小学校の5学級に協力を依頼し、学級経営の充実に結びつく係活動を究明した。その際、係のメンバー構成は、教師がリーダーシップを発揮してどの子も生きる係集団をつくるとともに、各係が取り組む活動内容は「遊び」を基盤とし、子供たちが自分たちの好きなことを、自分たちの能力の範囲内で、自分たちのペースで自由にできる活動に取り組んでもらった。その結果、学級内の対人的適応は向上し学級経営の充実に効果があった。

キーワード：自発的・自治的活動 学級経営 係活動 居心地の良い集団 遊びを基盤とする活動

1 研究の目的と方法

(1) 目的

平成29年度に告示された小学校・中学校学習指導要領（以下、学習指導要領）には、「学習や生活の基盤として、教師と児童〈生徒〉との信頼関係及び児童相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実に図ること」が示された。（〈〉は中学校）このことを受け、新学習指導要領小・中学校の解説特別活動編（以下、小・中学校解説）には「学級活動における児童生徒の自発的、自治的な活動を中心として、各活動と学校行事を相互に関連付けながら、学級経営の充実に図ること」が示された。

ここに示された学級活動における自発的・自治的な活動について小学校解説には、「自発的、自治的な活動は、自主的、実践的であることに加えて、

目的をもって編制された集団において、児童が自ら課題等を見だし、その解決方法などについての合意形成を図り、協力して目標を達成していくものである。」と示されている。自発的・自治的な活動は、学級活動の活動形態である、i) 話し合い活動、ii) 係活動、iii) 集会活動のことである。しかし、これらの活動が全て学級経営の充実につながるかといえばそうではない。教師から与えられた議題について課題意識を持たない子供たちが話し合っても学級経営の充実に繋がるまい。教師のお手伝い的な活動を行う係活動や一部の子供たちだけが楽しむ集会活動であっても学級経営の充実に繋がるまいと考える。

係活動について宇留田（1981）は、係活動の性格を、(a)学級全体にとってなくてはならないもの（必要感）(b)教師の下請けでなく、自分たちのやるべきもの（自主性）(c)創意と工夫を常に必要とするもの（創造性）(d)一人ではできぬ、数人の協

力を必要とするもの（協同性）(e)その仕事の遂行を通して、自他の様々な長所や短所を知ることができるもの（個性の理解）と述べている。また、岡村（1991）は、「児童生徒が自分たちの学級及びそこでの自分たちの生活を、より一層充実した、より豊かな、より快適なものにするために計画し展開する自主的、実践的な活動であるとしている。」さらに、小学校解説には、「学級の児童が学級内の仕事を分担処理し、児童の力で学級生活を楽しく豊かにすることをねらいとしている。」と示されている。つまり、係活動とは、より良い学級生活を目指して全員が学級内の仕事を分担処理する自発的・自治的な活動であると言える。

学級内の仕事を分担処理する活動には、係活動と当番活動がある。当番活動には、「日直当番」「掃除当番」「給食当番」などがある。これらの仕事は、秩序ある学級生活を送るために必要な仕事を、全員が役割を分担して取り組む活動である。だから、学級成員が「必ずやらなければならない活動」であり、教師の適切な指導のもと、責任感や奉仕の心を主に培う活動である。

それに反して係活動は、自分たちの学級を楽しく、豊かなものにするために、自分たちで創意工夫しながら取り組む活動である。そのため、「自分たちで計画し実践する活動」であり、主体性や協調性、創造性、企画性などを主に培う活動である。

青木（2002）は、「自発的、自治的な係活動を育てるためには、教師は思い切って、係の子供たちに仕事を任せる姿勢が大切である。」と述べているように、当番活動が教師の指導性が大きく発揮されるのに対し、係活動に対しては、「例えば、「生き物係」がその仕事に熱意を示さず、生き物への餌やりを怠けることがあっても、教師が注意を与えることは避けなければならない。」と述べるように、あくまでの係の仕事は子供たちに任せるものであるという立場である。

小学校の係活動の指導方法については、小学校特別活動指導資料（国立教育政策研究所,2014）

（以下、指導資料）に示してある。（表1）

ここには、入門期に当たる1年生時には、学級生活に必要な仕事を自分で見つけさせる。それ以降の低学年では、当番的な活動から創意工夫する係活動に移行するように指導する。中学年では、創意工夫する活動に協力して取り組ませる。高学年では、自主的な活動、自分の良さが発揮できる活動等係活動の質を高めることが示されている。

しかし、ここに示された指導の目安だけで係活動が学級経営の充実に結び付くのだろうか。

表1：発達の段階に応じた係活動の指導

1年入門期	学級生活にとって必要な仕事を見つけて自分から進んで取り組む。（一人一役の仕事見付けの段階）
低学年	少人数で構成された係で仲よく助け合って活動する。楽しい学級生活にとって係が必要であるという意識を高める。当番的な活動から創意工夫できる係活動に移行していくようにする。
中学年	低学年までの当番的な活動を整理統合し、創意工夫が生かされる係活動を組織する。協力し合って計画的に活動に取り組めるようにする。
高学年	教師の指導に頼ることなく自主的に係活動を進めたり、自分のよさを積極的に生かせる係に所属したりして、集団的な活動の質を高めていく。

岡村（1999）は、係活動の問題点について「係の活動内容について、児童たちの好き嫌いの格差が大きく、係への希望が特定のものへ偏る傾向が強い。すなわち、きれいな仕事、楽な仕事、目立つ仕事、見栄えのする仕事などに偏り、反対の性質の仕事は敬遠される傾向が強い。」と述べている。

ここに示された、きれいな仕事等と反対の仕事は、係活動を自分たちで創意工夫して進めていくときに必ず出現する。子供たちの係活動の様子を観察していると、みんなの前に出て係のお知らせをするなどの仕事や自分たちが作った賞状やメダルなどを渡すなどの仕事は進んでやりたがる子供が多い。反面、賞状やメダルなどをコツコツと作成したり重たい道具などを準備したりする仕事は敬遠しがちな子どもが見られる。しかし、自分たちで係の活動を進めていくときには、必ずやらなければならない仕事なのである。

このような場面は、一つの係活動の仕事にも見られるし、学級内に設置する係の種類にも見られる。ただ、このようなことをそれぞれの係任せにしまうと、発言力の強い子供や力の強い子供がきれいな仕事や目立つ仕事をして、大人しい子どもが嫌な仕事をやらされてしまうということが生じるのである。

係活動が、子供たちの自発的・自治的活動であり、子供たちに任せるものだからといって、組織編制から、活動内容の決定、仕事分担の全てを任せていいものだろうか。

係活動は、学期の初めなどに「学級生活を豊かにするために学級に置きたい組織」として、学級会で話し合っって設置することが多い。小学校特別活動指導資料（国立教育政策研究所, 2019）の学級活動の年間指導計画例の学級活動(1)「学級や学校における生活づくりへの参画」には、4月に「係

を決めよう」9月に「係活動発表会をしよう」が示されている。

ここでの話合いでは、どの係を置くか、各係は何人構成にするか、誰がどの係になるか、係相互の連携をどうするか、係活動はいつするかということなどが話し合われることが多い。

しかし、ここで係を構成するメンバーは、誰と誰が適切なのか、どの子も生きるメンバー構成はどうあればいいのかなどに注目されることはない。このことを安易に子供任せにしてしまうと、前述したように係という小集団の中で、綺麗な仕事ばかりをする子、そうでない仕事をやらされる子という集団として成立していない状況が生まれる。

永田(1987)は、集団を「組織化された集合態」であるとして単なる集合態から区別し、「組織化された集合態」の条件として、「役割と地位の分化」ならびに「集団規範の成立」をあげている。ここでいう組織化された集合態としての係の組織とは、係を構成するメンバーが、仕事を公平に分担し、係の目標を達成するために協力して仕事に取り組むことができる組織である。このような組織として成立した係を編制するためには、教師のリーダーシップが必要になってくる。

また、岡村(1999)は、係活動の問題点として「係の編成及びその活動に対して、意識が低く、意欲の弱い、受動的・消極的な児童生徒が多い。」ということを挙げている。これは、係の活動内容が魅力に欠けていることが原因であると考えられる。子供たちにとって魅力的な活動とは「遊び」である。自分のやりたいことを、自分の能力の範囲内で、自分のペースで自由にやれるのが「遊び」である。森(1990)は、「遊びの原理は近代教育思想の原理でもあった。遊びの原理を教育の原理として確立するということは、近代教育の原理に立ち戻ることにほかならない。子供を自己活動の主体者としてとらえる近代の子供観に、「特活」はまず立たなければならない。」と述べているように、係活動の内容に遊びの原理を取り入れていくことも自発的・自治的活動としての係活動には不可欠であると考えられる。

そこで、係活動が学級経営の充実につながる自発的・自治的活動になりうるための条件として、係のメンバー構成に教師が積極的に介入して、どの子も居心地の良い集団の中で係活動に取り組むようにする。また、子供たちが係活動に意欲的に取り組むように係活動の内容を遊びを基盤とする活動にする。

(2)方法

①期間 平成30年4月～7月

②対象 福岡県内小学校6年生(1学級)5年生(2学級), 4年生(1学級), 2年生(1学級)

③研究成果の測定

・学級適応感尺度 ASSES の活用

実践群の4月と1学期末の比較

実践群と対称群の4月と1学期末の比較

・学級担任の観察(抽出児の変容)

・児童アンケート

2 研究の内容

(1) 居心地の良い集団を意図的に編制する

指導資料には、「学年等によっては、各係の仕事に応じて必要なおおよその人数を決めてから、児童の希望を尊重して係の所属を決めます。」と示されている。つまり、係の所属「自分がなりたい係」は、子供たちの話合いによって決めさせるということである。

しかし、この場合子供たちは、自分のなりたい係、やってみたい係を選ぶことが主な目的となっており、係を構成するメンバーまでには意識が向いていないことが多い。その後、子供たちはそれぞれの希望を伝えながら、時には、譲り合ったり話し合いで解決したりして所属する係を決めていく。しかし、このような方法で所属する係を決めさせているのは、係を構成するメンバーの人間関係に問題が見られることが多く、前述したようなきれいな仕事をする子供とそうでない仕事をさせられる子供が出現することが多い。

そこで、係に所属するメンバーを決める過程に教師がリーダーシップを発揮して、どの子にも居心地の良いメンバーで構成した集団で係活動に組みこませることにした。

具体的な手順は次のとおりである。

- 1) 学級会で学級に置きたい係を決める。
- 2) 自分のなりたい係を第1希望から第3希望までを書いて教師に提出する。
- 3) 教師は、集めた希望表を見ながら、日頃の観察に基づいて一人ひとりの子どもが生きるようにメンバー構成をする。
- 4) 翌日、所属する係を発表する。

一人一人が生きるメンバー構成とは、「どの子どもが気が合うのか。」「誰とでも分け隔てなく付き合えるのはどの子か。」「あの子を支えるのはどの子か。」「あの子が気を許すのはどの子か。」などの視点で、メンバーの組み合わせを決めていくのである。

実験に取り組んでくれた学級では、次のような視点を持って組み合わせを決定している。

表2：A教諭のメンバー決定の視点

学級開きを行った後、休み時間に誰と過ごしているか写真を撮って観察した。

- ・授業中に色々な友達との活動を仕組み、どんな友達とどのような話しをしているのか観察した。
- ・「一学期は、〇〇さんと一緒に活動していけるかな」と声をかけることもあった。
- ・特に、これまでよく学校を休んでいた、気が強く、人間関係で問題を起こす女子に配慮し、「男女混ぜたほうがいいのか、系のメンバーをこのように決めようと思うけど、何かいい考えはないか、誰となら、楽しく学校に来れそうか、などを聞いた。
- ・2学期は、係活動の楽しさを知った子供たちの人間関係が広がるように構成したい。そのため夏休み明けの人間関係を観察したり聞き取りをしたりしたい。
- ・前学年での人間関係がこじれていたもので、お互いがのびのび楽しく活動できるメンバー構成になるようにした。

表3：B教諭のメンバー決定の視点

- 前担任から、①仲がよい子②あまり関わっていない子③過去にトラブルがあった子についての情報を集めた。
- 居心地のよいメンバー構成にするために
 - ・男女比は同じにした
 - ・①、②（上記）の関係である児童を組ませた。
 - ・③の関係である子ども同士は、基本的に同じにしない。（※2、3学期から関わらせる）
- 特に目立つ子（引き継ぎでの情報）は以下の配慮をした。
 - ◆ 落ち着きがなく、口調が強い子（1名）
 - ・その子にきちんと意見の言える子と組ませた。
 - 対等にものが言い合える雰囲気とその子の活動的な持ち味が十分に発揮できた。
 - ◆ 身の回りのことが自分でできない子（2名）
 - ・心優しく、手伝ってあげる子を組ませた。
 - 手伝ってくれる友達との信頼関係ができた。
 - ◆ 口数の少ない子 ※場面緘黙（1名）
 - ・心をゆるしている友達と一緒に組ませた。
 - 前学年のときよりも活発な様子が見られた。（前担任談）

表4：C教諭のメンバー決定の視点

- 特別支援学級（情緒）のAは、工作が得意なので、工作係にし、ひょうきんなAの良さを認め一緒に楽しんでくれるBとCを入れた。
- 誰にでも優しく、同じように接することができ、相手の意見も取り入れながら協力して活動を進めることのできるDとEは、特別支援学級のF(知的)と通級教室に通っているGと同じレク係にした。
- 特別支援学級H(知的)に対して、その子ができそうなことを見つけ、一緒に活動を進めることのできるIは、バースデイ係にした。

A教諭の場合、学級編制があったばかりの初めに受け持つ子供たちであったので、子供たちの人

間関係は十分に把握していなかった。そこで、学級開きから係のメンバーを決定するまでの間、子供たちの人間関係を写真を撮って観察している。また、子供たちが関わる活動を意図的に仕組みで、その活動の中での子供たちの様子を観察している。（表2）

B教諭の場合は、前担任からの情報収集から子供たちの人間関係を把握していることが分かった。その時の視点として、「仲が良かったのはどの子か。」「友達との関わりが乏しい子はどの子か。」「過去に人間関係のトラブルがあった子はどの子か。」など、人間関係に関するアセスメントを行っている。（表3）

C教諭は、工作が得意な子供は工作係にするなどその子の特性から係を決定し、その子との良い関係が結べる子供と組み合わせている。（表4）

このような、教師の意図的なメンバー構成について児童は次のような感想を書いている。

今年の係活動で自分の意見をちゃんと言うようになりまし。そして、4年生のときの係は女の子だけだったけど、5年生の係は男女がまじって、男子とも友達になりやすくなりました。やってみて感じたことはみんなが協力して、みんなと、とっても楽しい集まりができたことです。わたしは集まり係でいい係はしたことがありませんでした。ですが今年やってみてとっても楽しかったの、またしたいなと思いました。イベント係は、自分か言ったイベントがさばって実際にやるときは、とってもうれしい気持ちでした。2学期は他の係にチャレンジしてみたいです。

図1：A児の感想

係活動を通じてなにも知らなかった人と話し合ったりその人のよさを見つけたりかんじたりいろいろなことかできました。次はなにもするかとかかんじたりいろいろをやるかといういろいろ話し合いました。イベント係をやってみてかんじたことはみんなが元気に楽しくできるイベント係がいろいろ話し合えて楽しくできるとかんじました。自分か言ったところはみんなの力を借りたりするといいかんじたりも楽しくなったりすると思うことかかんじました。1学期の係かとうはちょっといいかんじたりもかんじたりして、今はそんなにならないうえからいいです。2学期の係かたのしめです。

図2：B児の感想

A児は、係活動の中で、自分の意見を言えるようになったことや、男女混合のメンバー構成で男子とも友達になれたことを書いている。（図1）

B児は、これまで知らなかった人と話せるようになったことや、その人の良さを見つけたり感じたりすることができたと書いている。（図2）

このような感想が書けるのは、教師が児童一人

一人の人間関係に留意しながら係のメンバー構成を行ったことによって、何でも言える安心感や友達になれそうという期待感などが生まれてきたからだと考える。

小川（1979）は、「当初はほとんど面識のない者同士で構成された学級集団も、それが学習・生活の単位として固定され、長期にわたる集団活動が営まれていくと、次第に児童・生徒相互の人間関係が成立し、心理集団として組織化されていく。」と述べている。つまり、子供相互の関わる時間が長くなればなるほど人間関係は密になるということである。このことを応用して、教師がリーダーシップを発揮して構成したメンバーでの活動は、係活動だけではなく、学習グループや週番、給食、清掃などの当番活動を行うグループ、給食を一緒に会食するグループとして活動が行えるようにした。そのため、座席も常にグループで活動できるように隣り合わせにした。教師の適切なリーダーシップの元、安心して過ごせるメンバーと係活動以外でも一緒に過ごす機会が多ければ多いほど、子供たちの人間関係はより緊密なものになっていくと考える。

(2) 遊びを基盤とする係活動に取り組ませる

係活動の内容は、当番活動のように決められた活動を繰り返し行うものでもなく、教師のお手伝いの仕事を行うものでもない。自分たちで、話し合っって創意工夫しながら取り組む活動である。

「遊び」の原理が係活動の内容になるということは、その活動は、「自分たちの好きなこと」であり、「自分たちの能力の範囲内で実施できること」であり、「自分たちのペースで自由にできること」である。

実践に取り組んでくれた学級では、次のような活動が行われた。

表5：実践群の学級で取り組まれた活動

アーチリレー・箱の中何だろうな・クイズ釣り
缶積み大会・名産物クイズ・音当て大会
誕生日カードづくり・手裏剣飛ばそう大会
タグ取り競争・歴史わくわくクイズ
じゃんけんボーリング大会
たたいてかぶってジャンケンポン
射的大会・4の2お誕生日給食・宝探し
意味がわかると怖い話・笛おに
椅子取りゲーム・椅子取りゲームその2
など

ここに示した活動は一部であるが、係活動の名

称からは、子供たちが、友達と楽しんで取り組んだことが予測される。(表5)



図3：N小5年「射的大会」



図4：H小5年「5メートル走」

図3は、N小の5年生が実施した「射的大会」であり、図4は、H小の5年生が取り組んだ「5メートル走」である。昼休みに、誰にも束縛されることなく、自分たちで計画した遊びに学級全員が興じている。この活動には、射的大会や5メートル走を企画した係の子供たちと、企画された係活動に参加している子供たちがいる。

これらの活動は、ただの思い付きで実施されることの無いように「企画書」や「係活動ノート」を作成させて、係の子供たちが活動の目標や、活動方法や手段、役割分担の共有ができるように、

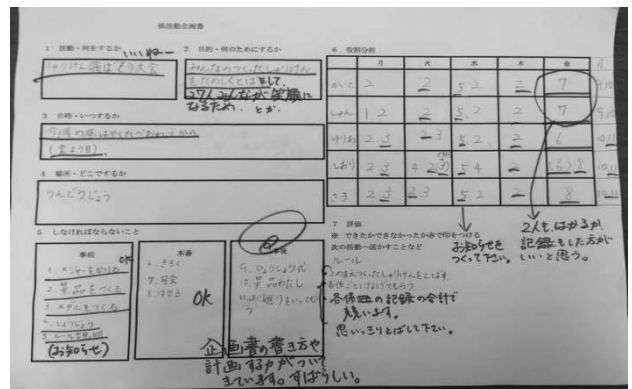


図5：N小5年の企画書

「取り組む活動の名前」「活動の前、活動中、活動後にしなければならないこと」「役割分担」を記入できるようにした。

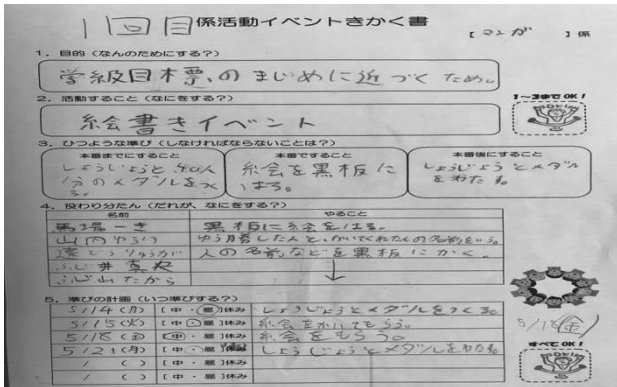


図6：K小4年の企画書

企画書の作成は、実践群の担任の個性に任せた。N小5年の企画書は、「何をするか」「何のためにするのか」「いつするか」「どこでするか」「しなければならないこと」「役割分担」を書くようになっている。また、K小の企画書は、「何のためにするのか」「何をするのか」「しなければならないことは何か」「役割分担」を書くようになっている。係活動の内容が「遊び」を基盤にしても、子供たちの成長に寄与する活動でなければならない。そのために、企画書のようなものを作成させて、教師に提出し、合格が出たら実施するという教師と子供たちの間にルールが設定されていた。係活動の内容は「遊び」を基盤としても、係活動は教育的な活動であり、より良い人間関係を構築する活動にするために企画書は必要なものである。

N小5年の企画書には、「何のためにするのか」のところに「27人みんなが笑顔になるため」という教師の朱書きが記入してある。活動は、「手裏剣飛ばそう大会」であっても、その活動が学級にとってどんなねらいを達成することになるのかという活動の価値に気付かせたいという教師の指導の構えが見えてくる。

狩野・田崎(1990)は、「一般に集団が成立するためには、①人々の間に相互依存関係があり相互作用が可能であること。②人々の間に共通目標があるいは規範が共有されていること。という条件が必要とされる。」と述べている。遊びの原理を基盤とする係活動であっても、系のメンバーが互いに、活動の目標を共有し、メンバー一人一人が自分の役割を責任を持って果たすという係集団の質を高めるためにも「企画書」や「係活動ノート」は不可欠なものである考える。

実践群の学級には、次に示す係が設置されている。どの学級の係もお手伝い的な内容ではなく、自分たちの創意工夫で活動内容が生まれてくることが予測される係である。(表6)

表6：実践群の学級に設置された係

学校	学年組	係名
N小学校	5年1組	ギネス係・飾り係・クイズ係 バースデー係・スポーツ係・音楽係
H小学校	5年1組	新聞係・ミュージック係・ギネス係 イベント係・あそび係・クイズ係 かざり係・誕生日係・思い出係
I小学校	6年2組	レク係・ギネス係・クイズ係 バースデー係・新聞係・工作係
S小学校	4年2組	新聞・ミュージック・かざり バースデー・スポーツ・ゲーム
S小学校	3年1組	ゼラオラスポーツ・楽しい生き物新聞 みんながえがおのお誕生日 みんながえがおのかざり・楽しいお楽しみ

3 研究の結果とまとめ

(1) 学校環境適応感尺度 ASSESS の結果から

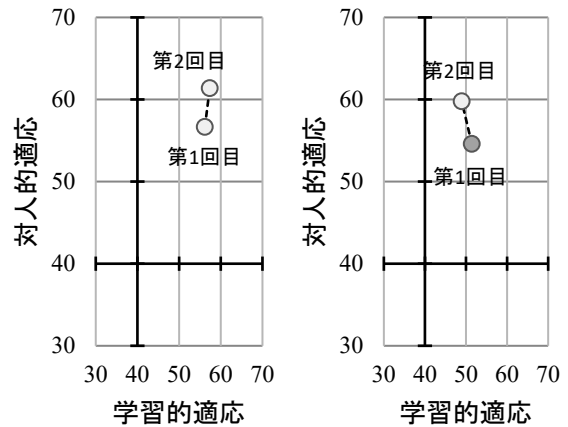


図7：H小，N小5年 ASSESS $p < 0.05$

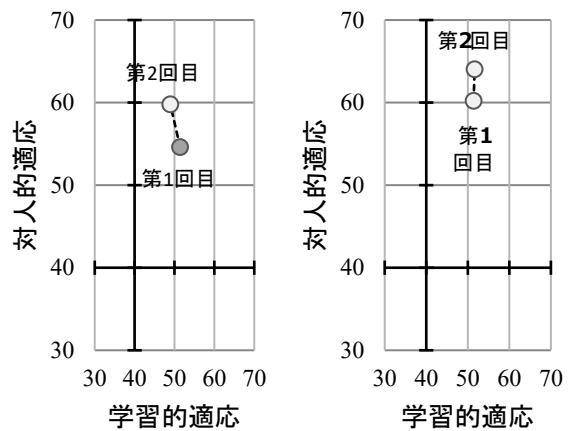


図8：K小4年，N小6年 ASSESS $p < 0.05$

図7, 8は実践群の学級(H小5年, N小5年,

K小4年, I小6年)の学校環境適応感尺度ASSESSの結果である。1回目は4月に実施した結果であり, 2回目は7月に実施した結果である。いずれの学級においても対人的適応の数値が有意に向上している。

このことから, 教師のリーダーシップで居心地の良い係集団にするためのメンバーを構成し, その集団で係活動だけでなく学習活動や当番活動などの活動も共にするなど関わる時間を長く確保したり, 学級みんなが喜んでくれる活動を創意工夫して取り組んだことは, 教師との関係や友達との関係を良好と感じたり友達との良い関係をつくるスキルを持っていると感じたり友達からいじわるなどをされたりしていないと感じている子供たちが1学期末には増えてきていることがわかる。

(2) 学校生活に関するアンケートの結果から
表7: クラスに対する子供たちの見方

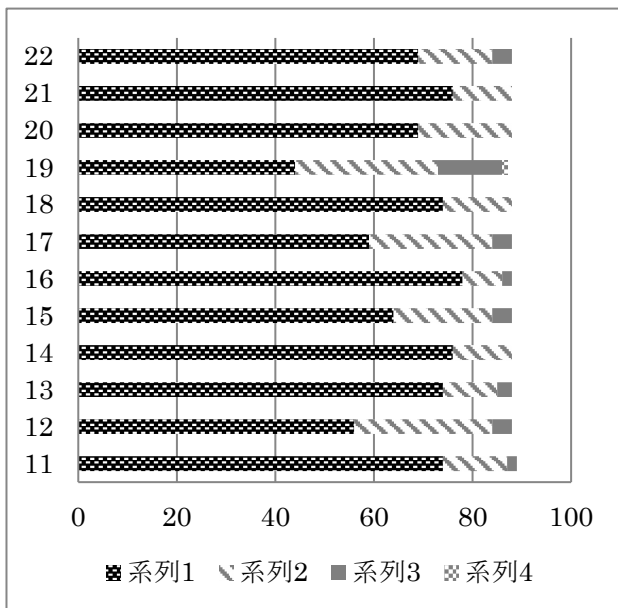


表7は, 学校生活に関するアンケートの中の, 自分のクラスに対する見方のグラフである。11番から22番までの設問は次の通りであり, 系列1(はい) 2(だいたい) 3(少し) 4(いいえ)という内容である。

- 11 このクラスはなかまはずれやいじめをなくそうと努力するクラスですか。
- 12 このクラスみんなは, そうじやあいさつをがんばるクラスですか。
- 13 クラスの人と, 話したりいっしょにいたりするのが好きですか。
- 14 あなたは, 休み時間などに, 友だちやなかまと楽しくすごしていますか。
- 15 クラスの中に, あなたの気持ちをわかってくれる人がいますか。
- 16 あなたのクラスは, よいなかまになるために, みんなで話し合うクラスですか。

- 17 あなたのクラスは, みんななかよしだと思いますか。
- 18 あなたのクラスは, 勉強やいろいろな活動に, きょうりょくしていると思いますか。
- 19 あなたは, クラスの中で, みんなの役に立っていると思いますか。
- 20 あなたが, 自分の思ったことや考えたことを発表したとき, クラスの人たちは, ひやかしたりしないで, しっかり聞いていますか。
- 21 あなたは, クラスの人がこまったり, かなしんだりしているとき, 力になりたい, なぐさめたいと思いますか。
- 22 あなたは, クラスの人によいことがあったとき, あなたもうれしいですか。よかったねと言ってあげたいですか。

アンケート結果から, 「自分たちのクラスは良いクラスにするために話し合うクラスだと思っている。」「休み時間を友達と仲良く過ごしている。」「いじめや仲間外れをなくそうとしている。」「クラスの人が困っているときは力になりたい。」と思っている子供が特に多いことが分かる。この他にも, 全体的にクラスに対する見方は肯定的である。これは, 居心地の良い集団で「遊び」を基盤とする係活動に取り組むことによって学級やそれを構成する学級成員に対する良好な見方ができるようになったからだと推察する。

(3) 係活動を通した個人の変容

S小学校4年の担任は, 4月当初C児について次のように記している。

仲の良い子に偏りがある。感情の起伏が激しく, 友達に強い口調であたったり, 相手によって態度を変えたりすることが多い。一人になることに不安を感じ, どこへ行くにも常に友達を連れて行く様子がよく見られる。
クラスの誰とでも仲良くしたり, 平等に接したりすることができるようにした。

1学期末のC児については, 次のように記している。

様々な活動を係で行うことで, あまり関わりのなかった友達とも次第に話すようになってきた。同じ係であった特別支援学級の子が急に転校することになった時は, その子が好きな動物の折り紙をプレゼントで渡したいと朝から一生懸命作っていた。

ここには, 良好な人間関係が作れないC児の変容が書かれている。係活動を通して係を構成するメンバーと同じ目標に向かって, 協力して活動に取り組む中で, 友達に対する見方が変わり自分から積極的に関わろうとしていることが分かる。

S小学校3年の担任は, B児の4月当初の様子を次のように記している。

学級の中で発言力があり、正義感が強い。好き嫌いがはっきりしており、言葉遣いも荒いことから、友達とのトラブルが多いと前担任から引き継いでいた。学習中もよく発表するが、読み書きに支援が必要で、自信のなさが現れることもあった。

1学期の後半には、次のように記している。

B児は、自分の係だけではなく友達の係にも協力的で、他の係が提案した遊びがうまくいかなかったときに、「楽しくないとか言ったらせつかく考えてくれたのにかわいそうだ」「うまくいかなかったけど次こうすればいいよ」と発言した。また、「他の係が考えてくれたのだから、ちゃんと参加しないといけないよ！もし自分の係が考えた遊びに来てもらわなかったら悲しいでしょ。」と友達に話している姿も見られた。

そして、1学期末にあった個人懇談でのB児の母親の言葉についても記している。

1学期末の個人懇談会で、B児の母親と話し、B児の係での頑張りを伝えた。B児の母親は、「3年生になってから、朝早く登校するようになったんです。学校が楽しいから、みんなと遊ぶために早く行っているようです。1、2年生の頃はそんなことなかったんですよ。1、2年生の頃は、誰と遊んでいるのか聞いても、〇〇くんと△△くんくらい…友達がいるのか心配でした。でも、3年生になってから、誰と遊んでいるのかを聞くと、『みんな！』と答えるようになりました。とても嬉しかったし安心しました。」と話されていた。それを聞き、私も嬉しくなった。3年生になってからは、友達とのトラブルも少ない。2学期以降も、係活動を通してみんなで遊ぶ楽しさを味わわせたい。

ここには、友達とのトラブルが多かったB児が他の係の友達のことまで考えることができるようになったことが記されている。このような発言ができるようになったのは、自分たちの係活動でも、友達に協力してもらいたいという経験を味わったからだと考えられる。また、居心地の良い集団での活動は、自分たちの集団だけではなく、他の集団に対しても協力しようとする態度が育ってきたのではないかと推察する。さらに、母親の言葉のなかにある、「みんなと遊んでいる。」という言葉からは、それぞれの係が企画する活動が活発に行われていたことが分かるとともに、それぞれの活動が楽しいものであったと考える。子供同士のトラブ

ルを解決する方策の一つは、子供同士を関わらせることだと考える。

(4) 考察

河村(1999)は、学級崩壊を起こす教師を学習・生徒指導重視型教師とし、指導に偏ってリーダーシップを発揮するタイプだと述べている。このタイプの教師は、子供を評価する視点で見ていることが多いという。

反対に、子供の居場所となる学級を育成している教師を、自己の確立重視型教師であるとして、指導と援助を統合して強くリーダーシップを発揮するタイプだと述べている。このタイプの教師は、指導と援助をバランスよく行うので子供達は主体的な学級生活を送れるようになると述べている。

正に、子供たち一人一人の人間関係を十分に考慮して、遊びを基盤とする係活動に取り組みせる教師は、自己の確立重視型教師とも言える。

係活動が自発的・自治的な活動として学級経営の充実に結びつくには、子供たちに係活動の内容は任せるが、係を構成するメンバーの組み合わせにはリーダーシップを強く発揮することが大切であると考えられる。特に、学級編成が行われ担任として初めて受け持つ場合には、子供たちの人間関係に十分な配慮が必要である。その部分を子供任せにしてしまうと、係集団の中に格差が生まれ、いじめに似たような構図が出来上がっていくことも考えられる。

自発的・自治的な活動で学級経営を充実させるといっても、どこまで教師が指導性を発揮するのか、どこまで子供に任せるのか、子供たちの実態を精緻に見極める教師の観察眼が必要になってくると考える。

主な引用・参考文献

- 青木孝頼(2002). 特別活動指導の基本構想 文溪堂
 蓮尾直美・安藤知子編(2013). 学級の社会学 ナカニシヤ出版
 片岡徳雄編(1990). 特別活動論 福村出版
 河村茂雄(1999). 学級崩壊に学ぶ 誠信書房
 小川一夫編著(1979). 学級経営の心理学 北大路書房
 岡村二郎編著(1991). 学級係活動の指導方法 明治図書
 小学校学習指導要領解説特別活動編(平成29年告示). 文部科学省
 吉田俊和・橋本剛・小川一美編(2012). 対人関係の社会学 ナカニシヤ出版